

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：32511

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25870694

研究課題名(和文) ホームヘルプ事業草創期に原崎秀司が受けた教育的・思想的影響に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Hideshi HARASAKI's Educational and Ideological Influence in the Dawn of Home-help Services

研究代表者

中島 洋 (NAKASHIMA, Hiroshi)

帝京平成大学・現代ライフ学部・講師

研究者番号：00531857

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：長野県社会部厚生課長であった原崎秀司は、ホームヘルプ事業の先覚者としてのみならず、全日本方面委員連盟書記として方面事業にも精通しており、この経験が欧米視察後の成果につながったことは注目される。原崎直筆の日誌などの第一次資料を分析すると、彼が真の豊かさを政治・経済・思想の強化に求めたこと、欠陥の克服こそが社会変化につながることを、現場視察や調査を繰り返し、実情把握に努めたこと、映像や音声に依拠したメディアの活用により人々の意識を啓発したことなどの知見を得た。ホームヘルプ事業創設以前から見られた彼の現場主義という姿勢から、人に触れ問題意識をもちつつ得られた見識や経験がその後の新事業化に反映された。

研究成果の概要(英文)：This study is intended to reveal Hideshi Harasaki's thought and practice empirically not only as a pioneer of home-help service, but also as secretary of the federation of Houden-iin services. To this end, we analyzed primary source materials including Harasaki's own handwritten journal. Results yielded the following knowledge: 1) Harasaki sought true wealth in the strengthening of politics, economy, and thought; 2) he emphasized a strategy of overcoming disadvantages, rejecting undue emphasis on advantages; 3) he continued observation study in Japan, which made out the actuality in areas; and 4) he assigned importance to evidence-based practices by making use of media that depicted true images realistically. Results demonstrated that the consideration of Harasaki's approach to Houden-iin service led to highlighting his respective backgrounds and roles before the establishment of home-help services.

研究分野：社会福祉学、社会福祉史

キーワード：ホームヘルプ事業 方面委員制度 社会福祉思想 原崎秀司 創造性

1. 研究開始当初の背景

(1) 自助自立や地域福祉の推進が強調される昨今、在宅福祉の充実が急務といわれて久しい。しかし、地域社会を広く見渡すと、孤独死、無縁死、ホームレスなどの社会的排除の問題や、認知症介護、老老介護などの介護の質や専門性の問題など残された重要課題が少なくない。こうした現況下において、要介護高齢者や在宅生活者の生活の質(QOL)に直結する在宅福祉の充実・促進に影響を及ぼすホームヘルプ事業の展開過程を、原点に立ち返って捉え直す歴史研究が重要である。

(2) シルバーサービスの質の担保や質の高い人材育成が志向される今日の動向を踏まえた場合、在宅福祉実践を公的職業として行うホームヘルプ事業の歴史により注目する必要がある。その際、公的職業としてホームヘルプ事業を英国から長野県に導入した原崎の着眼は、その後、日本初の組織的なホームヘルプ事業とされる家庭養護婦派遣事業(1956)の創設へとつながったことから、既存のボランティア的な取り組みを超える実用的な実践を生み出す起点となっており、注目に値する。

2. 研究の目的

昭和20年代後半、原崎秀司が行った欧米社会福祉視察研修を介したホームヘルプ事業への着眼は、今日の福祉社会を支える在宅福祉システムの呼び水となっている点が意義深く、その着想の発端は彼の思想的背景を明確にして初めて把握できる。原崎思想の探究では、彼に影響を与えた教育的・思想的背景を、若年期から壮年期に至るまで探る必要がある。以下、昭和30年代迄の原崎の思想を究明すべく、次の3つを課題とした。この考察は社会福祉思想史を掘り下げる契機となる。

- (1) 長野県社会部厚生課長時の原崎が果たした役割を明確にするため、長野県庁関連資料を精査すること、
- (2) 欧米視察や国内視察など現場を重視した原崎の思想的特徴を、彼の記した日誌などの質的資料を分析しながら明らかにすること、
- (3) ホームヘルプ事業の先覚者であった原崎が全日本方面委員連盟書記として、方面事業とどのように関わっていたのかを実証的に明らかにすること。

3. 研究の方法

本研究では、ホームヘルプ事業草創期の原崎秀司の思想及び役割の明確化を目的とし、日誌、回顧録、史料などの第一次資料を紐解き、史実を発掘することを通じ、埋もれていたホームヘルプ事業史の思想的側面を照射する。そして、社会福祉・介護福祉領域の歴

史的アプローチの特徴と課題の明確化に努める。そのためには次の3つの方法で歴史研究を進める必要がある。

- (1) 既に入手している原崎直筆の3冊の日誌(『歌稿 第一輯』・『遠保栄我記(新正堂版)』・『母子日記』)の精査、『長野県議会会議録』『長野県職員録』『通知・通達』などの実証的分析、
- (2) 日誌、新聞記事、論稿など原崎の記録物を対象に、テキストマイニングを用いた計量的分析、
- (3) 地元新聞紙・機関誌『方面時報』・年史などの書籍の分析から彼が果たした役割の詳細の追究と、原崎の受けた影響の明確化の考察。

4. 研究成果

(1) 本研究では、ホームヘルプ事業草創期における女性労働問題とホームヘルプ事業創設との関わりの観点から、県や市における社会問題への共通認識並びに同事業の普及要因としての家庭養護婦派遣事業創設後の研修会・研究会の意義を明確にした。

2009(平成21)年以降、「地域主権」を標榜する民主党政権が樹立され、その後、自民党復権などの政策展開がみられるなか、地方自治のあり方への関心がいっそう高まっている。にもかかわらず、認知症介護・在宅介護などの生活問題や、ホームレス・孤独死などの社会的排除の問題など、生活者に身近でありながら表沙汰になりにくい問題が少なくない。こうした現況下では、ただ単に他から干渉されず、地域住民の自由な意思に基づき、自由に行われる形式的な地方自治ではもはや通用しまい。民意を十分に反映した民主主義の原理が地方自治の根本理念であるならば、潜在的ニーズを掘り起こしたり、弱い立場にある人々のニーズを吸い上げ、政策形成へと汲み入れるための積極的な支援や助言、アプローチ法こそが求められる。

BARTLETTは、社会福祉実践の共通基盤として、「価値」「知識」「介入」を重視するが、1950年代の家庭養護婦派遣事業の創設・展開過程では、「失業問題」や「未亡人問題」を前提とし、緊急性を要していた女性や生活困窮者のニーズが、当時としては目新しかったホームヘルプ事業創設に反映されたことで、「知識」「介入」を推し進めていた。さらに、従来サービス受給者となるが多かった未亡人や単身女性たちがサービス提供者として認識され、「女性の積極的雇用」が検討されることを通じ、「価値」の側面においても大きな転換がみられた。つまり、性別役割分業が根強かった時代に、生活困窮者に対する内職や授産、ホームヘルプなどによる職業的自立が志向され、母子世帯出身者を中心とした女性の就業が生活自立を目ざし推奨されたことは、ジェンダー問題やセルフ・ヘルプなどの今日的議論へと通じており、女性の「個の尊厳」が見直されたことに他ならない。

母子世帯出身者や未亡人が担い手の約 44.4%を占めた初期の同事業では、実際に生活困難に直面していた人々の視点から解決策が考案されていたことから、今日のクライアント中心アプローチを体験的に試みる場となっていたと把握できる。

但し、その反面、雇用された母子世帯出身者の多くが病気や戦争などの死別母子世帯であり、今日のような離婚や未婚の母ではなかったことに注意しなければならない。すなわち、同事業は単に生活困難に直面している女性の生活自立のみを意図していたのではなく、父親不在の不遇な家庭環境下において、家族主義的な擁護論としての意味合いをも有していた。こうした家父長制への“つかい棒”としての擁護論の検討やその論議の深まりもまた意味深いものであり、今後の追跡調査の結果が待たれる。さらに、同事業に従事した家庭養護婦たちの生活が、当該事業だけでは十分に成り立たなかった事実を考慮合わせると、福祉労働と他分野での就労との併行や組み合わせなどについての言及も求められよう。一般家庭や私人が保有しているまだ見ぬ歴史的資料をいかにして発掘していくか、といったアプローチ方法も吟味しなければならない。

(2) 原崎の日記及び論稿の記述内容のすべてをテキストにした結果、総抽出語数 43,603 (うち、19,795 使用) 異なり語数 6,783 (うち、6,068 使用) であり、文書の単純集計では 2,183 ケース、238 段落であった。テキスト化の過程では、文脈を十分に考慮した上で、「英国 イギリス」「米国 アメリカ」「自分 私」などのように語の統一を行った。次に、「語の取捨選択」では、「ホームヘルプ」「国際連合」「社会福祉」「社会事業」「奨学生」「社会福祉主事」「視察」「研修」「アメリカ」「イギリス」「スイス」「方面委員」「方面事業」「方面委員制度」「民生委員」「厚生課長」「長野県」「修一」「日本人」の 19 語の各々に対し、強制的に語の結合を行い、言葉の本質の喪失に配慮した。こうした前処理ののちに、抽出語リストでは頻出語 150 語を抽出し、本稿では上位 40 語のみを掲載した。具体的には、生活(97)、思ふ(92)、自分(88)、見る(72)、帰る(70)、夜(66)、社会(63)、家(62)、今日(59)、国(51)などが出現数上位語であった。

次いで、最小出現数 25、最小文書数 1 とした階層的クラスタ分析を行った。その結果、ここでは 6 つのクラスタに分類でき、第 1 クラスタを「欧米社会福祉視察研修」、第 2 クラスタを「故国日本への回顧」、第 3 クラスタを「公務労働と方面事業」、第 4 クラスタを「わが子の成長」、第 5 クラスタを「家庭生活と県民生活」、第 6 クラスタを「妻への心配と読書」と命名した。人、生活、思想及び公務の 4 視点から捉え直すと、第 1 クラスタを「公務」、第 2、第 3 クラスタを「思想」及び「公務」、第 4、第 5、第 6 クラスタを「人」及び「生活」に類型化した。

次いで、原崎の思想的特徴を強制抽出後の共起ネットワーク(最小出現数 25、最小文書数 1)により分析した(図 1)。具体的には、「見る」「帰る」「来る」「出来る」「行く」「思ふ」「書く」などが各要因をつなぐ鍵であることが読み取れる。さらに、図 2 に明示した対応分析(最小出現数 25、最小文書数 1)では、原崎の思想的特徴の傾向として、縦軸を「パブリック プライベート」、横軸を「思考 実践」とした。各要因の散布具合から、人と思想はプライベート面でみられる傾向が強く、反対に公務(視察)はパブリック面でみられたものの、両面の接点には、生活と仕事(公務)の近接がみられたところに一つの特徴を看取り得た。こうした公私関係のあり様を実証的に考究することが、ホームヘルプ事業を着想し得た原崎の思想形成をさらに深く理解することになると考える。一方、人では「修一」や「坊や」など原崎の長男に対する強い思いのほか、「パパ」「父」など、原崎による自分自身への省察に特徴がみられた。その他、思想では、「読む」「書く」などに象徴されるように、彼の日頃の習慣であった読書や日記の記入を通じ、新規事業・制度の構想の下地が描かれていた側面を把握できた。

図 1 原崎の思想的特徴に関する共起ネットワーク

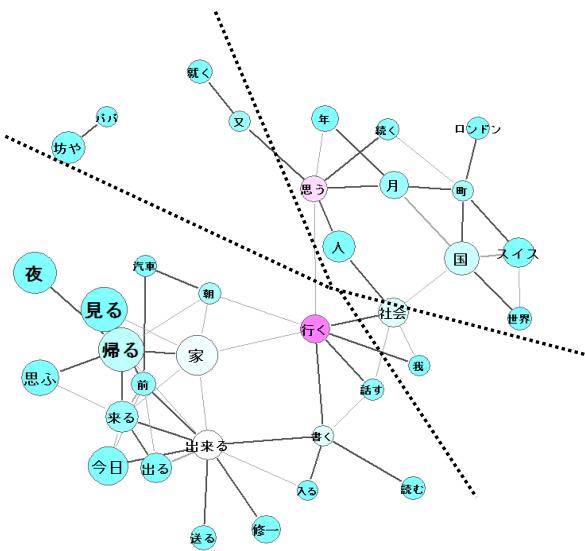


図 1 原崎の思想的特徴に関する共起ネットワーク

【注 1】 頻出回数は 25 回、描画数は 60 である。グループ分けを点線で示した。
 【注 2】 本図では強い共起関係ほど太い線で描画し、出現数の多い語ほど大きい円で描画した。
 【出典】 筆者作成による。

中嶋 洋、久美、ホームヘルプ事業草創
期を支えた人びと 思想・実践・哲学・
生涯、2014、154

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

[http://184.73.219.23/jarcw/html/backnum
ber.html](http://184.73.219.23/jarcw/html/backnumber.html)（「介護福祉学」バックナンバー）

[http://www.jssw.jp/conf/62/program_list
_oa.html](http://www.jssw.jp/conf/62/program_list_oa.html)（第 62 回日本社会福祉学会口頭発
表プログラム）

[http://www.jssw.jp/journal/2015/journal
_56_01.html](http://www.jssw.jp/journal/2015/journal_56_01.html)（「社会福祉学」目次一覧）

<http://www.ozorasha.co.jp/f-ikiru.html>
（大空社、新刊紹介）

<http://uejp.jp/>（全日本大学開放推進機構
[UEJ]、図書寄贈）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中嶋 洋 (NAKASHIMA, Hiroshi)
帝京平成大学・現代ライフ学部・講師
研究者番号：00531857